2023年08月07日 中日新聞 朝刊 21頁

関東大震災 今こそ教訓に

来月1日で100年

名大・武村特任教授に聞く

震災研究の第一人者

たけむら・まさゆき　1952年、京都市生まれ。東北大大学院、大手ゼネコン鹿島を経て、名古屋大減災連携研究センター特任教授。関東大震災関連の著書は多く、今年5月には「関東大震災がつくった東京」（中央公論新社）を出版した。名古屋市在住。

一九二三年に起きた関東大震災から九月一日で百年となる。名古屋大減災連携研究センターの武村雅之特任教授（七二）は、地震学者として三十年以上、震災を研究し続け、第一人者として知られる。節目を前に、その思いや今の時代に伝えるべき教訓を聞いた。

―そもそも関東大震災は、どれほどの災害だったのか。

日本の自然災害史上、最大の被害を出した。当時の人口や国内総生産（GDP）比などで考えると、死者や経済被害は二〇一一年の東日本大震災のおよそ十倍。まさに国家存亡の危機に遭遇したと言える。

―その研究を始めたきっかけは。

大学院で地球物理学を専攻し、（大手ゼネコン）鹿島に入社して地震の揺れを予測する仕事をしていた。でも、予測なんて無理だし面白くない。そんなとき、岐阜地方気象台で、震災を引き起こした「大正関東地震」の観測記録を見つけた。一九九二年のことだ。

関東地震は揺れが強すぎて地震計の針が振り切れてしまい、正確に記録が取れたものは国内にはないとされていた。ただ、岐阜には震災当時、「今村式二倍強震計」という地震計があった。比較的強い揺れも測定できるよう設計されていた。記録が残っているのではと思い、職員と段ボールが雑然と山積みになっている部屋を探した。棚の箱の中に、地震の揺れが鮮明に描かれた紙があった。「あ、これだ！」と身震いするほど興奮した。それが始まりだった。

その後、他の気象台や大学に行って同じように振り切れていない記録を見つけ、改めて本震のマグニチュード（M）を推定すると、M8・1±0・2と精度良く確定できた。また、地震計には本震だけでなく、多くの余震も記録されていた。分析すると、実に六つの余震がM7以上の規模だと分かった。

―震度の分布図も二〇〇三年に作り、今も多くの研究者に引用されている。

被災地域全域で市町村別に木造住家の全壊率を評価し、震度を推定した。震災から八十年が過ぎてやっと震源近くの詳しい揺れの分布を明らかにできた。神奈川県のほぼ全域と千葉県南部は震源断層の真上にあって、震度7の地域も広く、全壊率が100％に達する町村もある。東京は震源断層から外れていて、当時最も大きかった本所区でも全壊率は22％で震度6強だった。揺れの中心は決して東京ではなかったことが分かる。

それでも、被害の七割を東京が占めた。なぜか。明治維新以降に政府が富国強兵を考え、産業育成をした。地盤の悪い隅田川の東側に工場をどんどん建て、従業員もそこに住んだ。都市の基盤整備をしないまま、人口集中の木造密集地域ができ、火災が起きて延焼した。それが、東京が最大の被災地となった原因だ。

―この十年ほどは、各地に残る慰霊碑や体験者の証言も調べている。

カメラ片手にバスや地下鉄といった公共機関を使い、慰霊碑や復興碑などを神奈川県で六百カ所以上、東京で五百カ所以上調べた。石碑の裏には補助金の寄とか関わった人たちの名前とか、公文書だけでは追い切れない、市民目線の情報が入っている。

―関東大震災は中部地方にも関係があると。

東京が焦げ野原になり、政府が汽車賃を無料にして多くの人が東京から各地に避難した。愛知県内への避難民は九月末までに十五万人に上った。そうした人々を地元の在郷軍人会や青年団、婦人の会が救護した。名古屋市千種区の日泰寺には関東大震災の供養と慰霊碑が残っている。

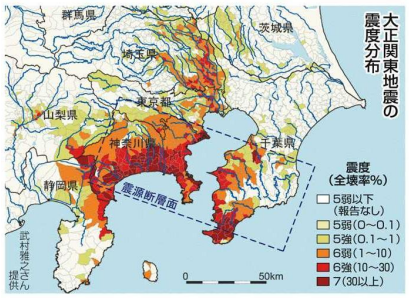
博物館明治村（愛知県犬山市）には、震災が起きた時に東京にあった建物がたくさん移築されている。震災当日に開業した「帝国ホテル」の中央玄関や、負傷者を治療した「日赤中央病院棟」、鋼鉄製で焼け落ちずに約一万人の避難に役立った「隅田川新大橋」がそうだ。震災をくぐりぬけた建物だからこそ、貴重な歴史を物語ることができる。

―百年たった今、私たちが学ぶべきことは。

震災後の帝都復興事業は、国民的合意の下で、市民のための公共性を第一に、首都として恥ずかしくない品格のある街を目指した。街路を広げ、橋は耐震耐火構造と美観を徹底し、市民の憩いの場となる公園を多く造った。

ところが戦後は、経済が優先され、東京では首都高速道路の建設で水辺が破壊された。木造密集地域は残ったまま。二〇〇〇年以降も高層ビルが林立し、災害時に帰宅困難者が急増することが懸念されている。ひたすら経済成長を目指し、地震に弱い街になった。

街は住みやすさが大切。関東大震災から百年の今こそ帝都復興事業に学び、もう一度街のあり方を見直す機会にしたい。



武村雅之さん提供

㊤関東大震災後に被害データをまとめた「震災予防調査会報告」　㊦岐阜地方気象台で発見した揺れの記録のコピー＝いずれも名古屋市千種区の名古屋大減災館で

関東大震災　1923（大正12）年9月1日午前11時58分に相模トラフで起きた推定マグニチュード（M）7.9の大正関東地震に伴う災害。火災や建物倒壊、土砂災害、津波などが発生し、計約10万5000人が犠牲となった。旧東京市本所区の「陸軍被服廠（ひふくしょう）跡」は、火災やそれに伴って発生した旋風に襲われ、避難した4万人のうち約3万8000人が亡くなった。

六つの余震 M7以上／東京は地盤整備せず被害／帝都復興に学ぼう

次回の「備える」は「防災の日」、九月一日の予定です。

災Seeing 大洪水 家の2階まで泥水

▶27◀　9・28豪雨災害（岐阜県美濃加茂市）

㊤岐阜県美濃加茂市内で水害に遭い、消防団に救助される人々（美濃加茂市民ミュージアム提供）　㊦浸水位を表す太田小の石碑を前に、2度近く浸水した、と説明する松尾名誉教授＝同市で

一九八三年九月二十八日に台風による大雨で木曽川が氾濫し、岐阜県美濃加茂市などを襲った「9・28豪雨災害」から、今年で四十年となる。中部の大学の松尾直規名誉教授（河川工学）は「それまで経験したことがないような大洪水で、低い堤防を乗り越えて水がどっと流れた」と語る。

台風10号の北上とともに秋雨前線が活発化。降雨が続き、美濃加茂市では戦後最大規模の洪水が発生した。同日午後七時ごろに市内に水が押し寄せ、十一時過ぎには家々の二階まで泥水が流れ込んだという。市内で一人が死亡、住宅千六百七十六戸が床上浸水などの被害に遭った。

その爪痕や記録が各地に残る。同市太田小学校には、浸水位を示す石碑が体育館脇に立っているが、人の背丈よりも高い。木曽川沿いの祐泉寺では、本堂の柱に水に漬かった印がある。住職の龍山大耕さん（69）は「二階に避難し、夜が明けると外は一面の海。団の家財道具が木に引っかかっていた」と振り返る。

同市の美濃加茂市民ミュージアムは当時の被災写真を常設展示している。腰まで水に漬かりながら消防団に救助される人々や、浸水した市役所の様子が残され、緊迫した状況が伝わる。

近年も、二〇一五年の鬼怒川や一九年の千曲川など全国で大きな河川の氾濫が相次ぐ。松尾さんは「気候変動で過去にない大洪水がいつ起きてもおかしくない。過信せず、自治体が出す情報を受け止め、いち早く命を守る行動を」と呼び掛けている。（横井武昭）

CBCテレビによる動画はこちら

（ｃ）.中日新聞社　無断転載、複製、頒布は著作権法により禁止されています